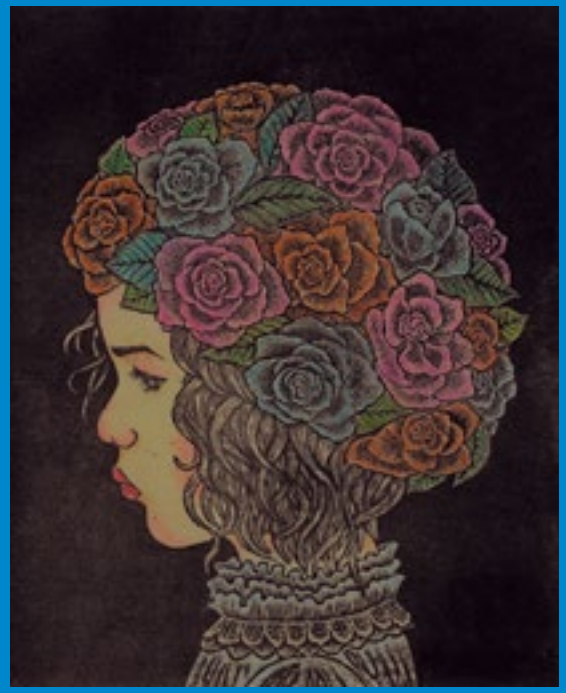
まちてくギャラリー24

東和町土澤商店街での日常に溶け込む美術

2018年2月〜4月の展示 小泉 誠　小泉 美佳

小泉 誠 「向こう側ー古の階段」 フォトエッチング



小泉 美佳　花帽子　木口木版

「まちてくギャラリー」#24
2018年2月、3月、4月の展示

資料提供
小泉 誠・小泉 美佳
展示場所　花巻市東和町土沢商店街22ヶ所
発行　東和町土沢商店会連絡会　2018年3月　20日
企画編集　tonccaci atelier　花巻市東和町田瀬14−120

「まちてくギャラリー」は365日いつでもそこにある美術として
はがき大の作品写真を3枚ずつ箱に入れて、東和町土沢商店街の
22ヶ所に展示しています。
展示は3カ月毎に入れ替え、展示は年に4回です。
その都度に、こうして小冊子を記録として作っています。

これから

萬鉄五郎記念美術館と有志で、アート＠土澤というプロジェクトを10年間で6回やってきましたが、いつもその展覧会が終わる時のむなしさが気になっていました。

期間を区切った展覧会は当然、終了の日があり、次の日からはまた、いつものように観客もいなくなり寂しい町並みに戻ってしまうからでした。

それは当然のことですが、そうしたイベントはやる方も、参加する人にとっても、非日常的な特別な日々だから、力も入るし、動機にも集中できる要素の多いプロジェクトになります。非日常の力は火事場のばか力です。

それにたいして、毎日そこにあって日々の生活に隠れてはしまうけれど、いつでも美術のことを考えられる展示があってこそ、美術の街だよな、と思ってこの街てくギャラリーを始めたのです。

それから5年が過ぎて、回数も24回目になりました。

少しずつ展示の内容も変わったし、この小冊子もそれなりに部数も増えて発展をしてきました。この号は８００部作りました。

最初は作品写真を街の中に展示して、兎に角、小冊子にして残そうというだけの、夢中な作業でした。レーザープリンターで印刷をして、帳合いをつけ、ホッチキスで中綴じにして１００部作るのがやっとでした。

そして、前回は６００部作って、画廊や美術館へ10部20部と送っているとあっという間になくなってしまい、後から２００部増刷しました。

そういうふうに、多くの人が見るとなれば、あまり無責任もできないと思うようになり、提供してもらった作品写真に、私がいい加減な感想を書いている個人誌の範囲を超えてしまう部数になったのかもしれません。

今まで私は作品の写真があって、それで伝わることがあれば、それに依存してしまおうと考えていました。画廊の入り口にある沢山の案内状が貼られている壁から伝わる力に倣ったのです。

しかし、これからは写真だけではなく簡単でも、略歴も添えた方が、初めて見る作品に対しては親切なのかもしれないと思い始めました。

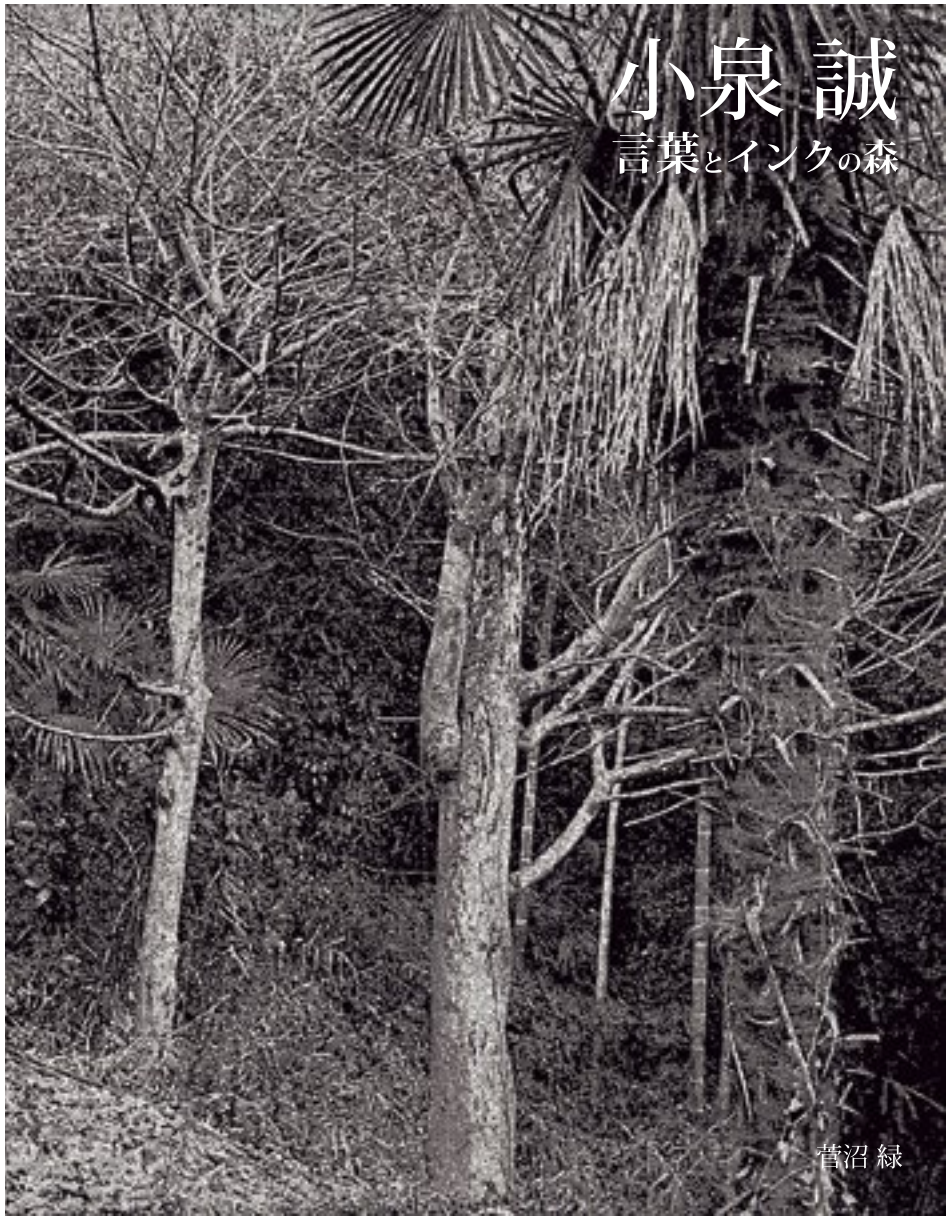
美術館などで作る図録は、資料としての意味が非常に強いので、作家に関するデータは網羅されます。個人が作る多くのポートフォリオも、美術館の図録の制作形式に習うようです。

しかし、多少あまのじゃくの嫌いがある私としては、作品は作品であるという、偏狭なまでな思い込みのために、それを押し通してきましたが、ここへ来てそれも方針変更です。かつてくわえて、次の号の25からは、原稿をほかの人にもお願いをして、ますます個人誌ではすまなくなる要素が増えると思います。しかし、そうなると責任が重くなり、いい加減を旨とするなど寝言も程々にしろと言われるかもしれません。

でも、どこまでいっても、できることとできないことはついて回るので、かちんこちんなことは絶対にできないでしょう。お金のことも含めてねえ。

バックの写真は、いつ落ちるか気が気ではなかった、雪庇。私もいつ落ちるか知りませんが、それまではやるつもりです。あしからず。

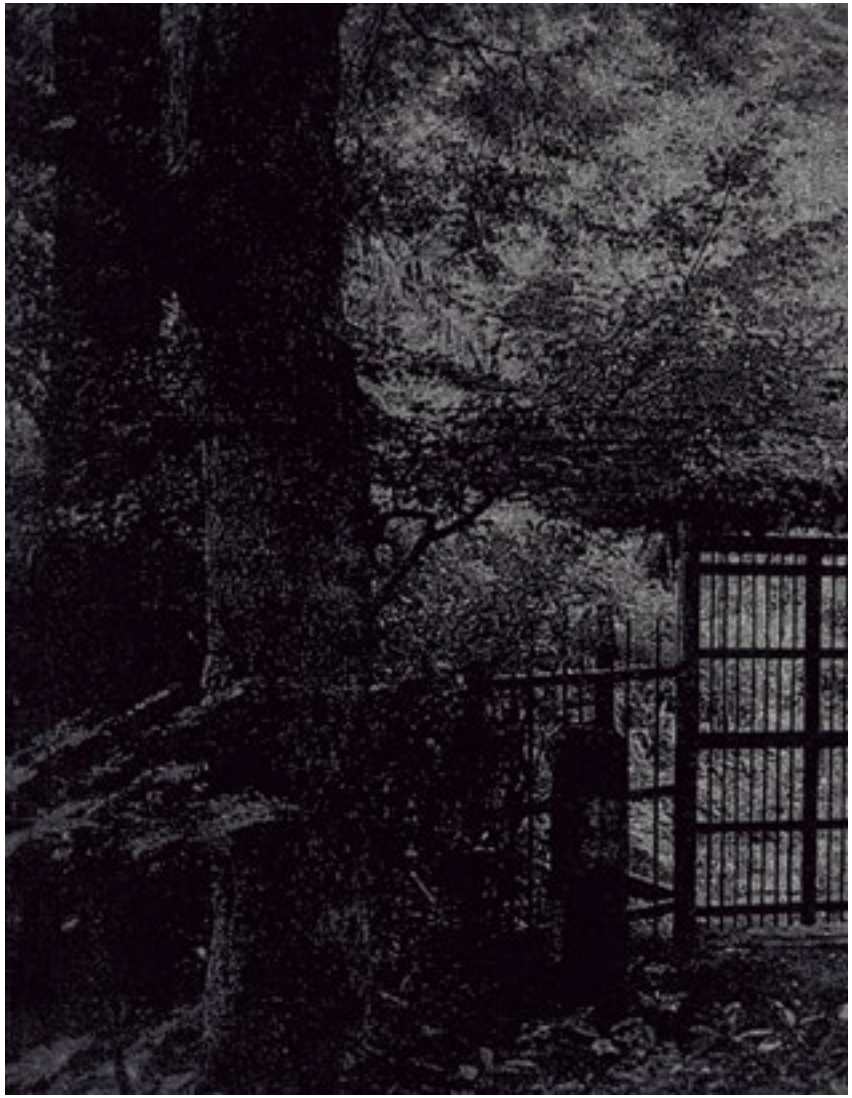
「山の中の庭」 フォトエッチング

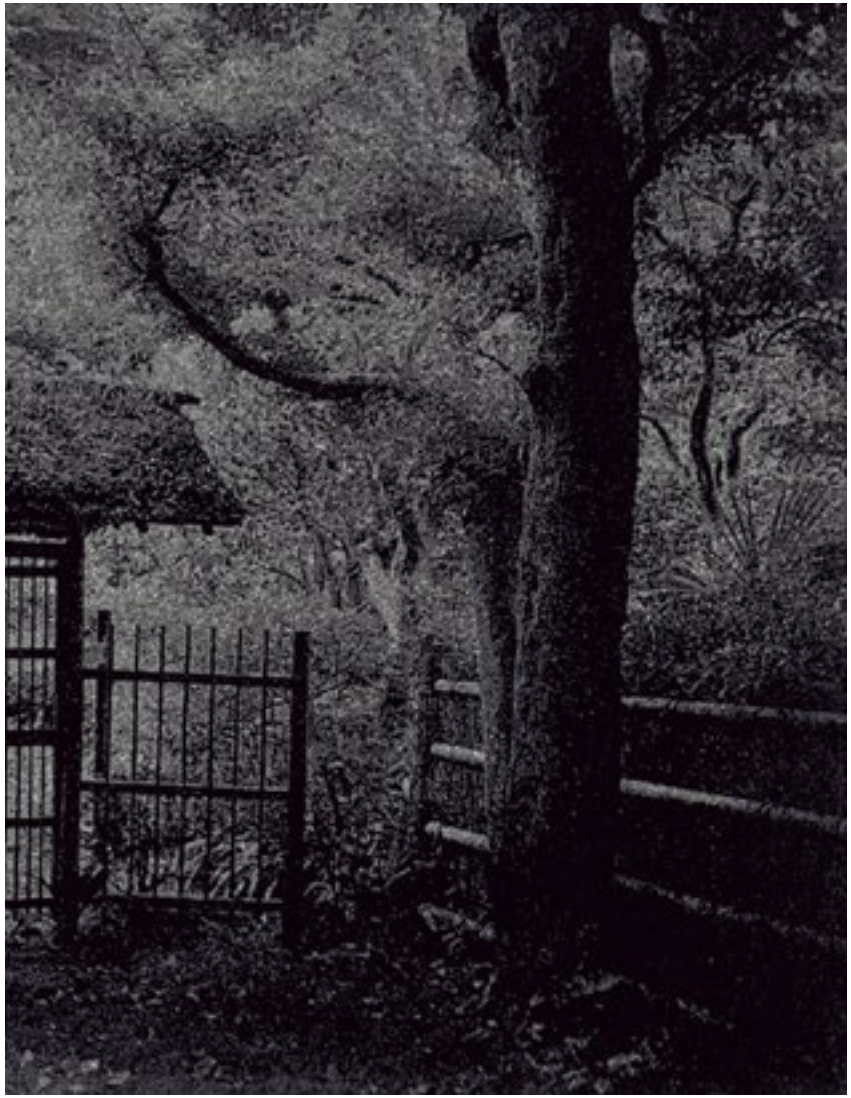


小泉 誠

言葉とインクの森

菅沼 緑





「錦秋の門」 フォトエッチング

「遠い日」　フォトエッチング

小泉誠さんと美佳さんの夫妻は、鎌倉の極楽寺に住んでいます。極楽寺も鎌倉の中にあって丘陵地帯です。鎌倉は海岸からすぐに丘陵が続き、平らな地面は由比ヶ浜と材木座から八幡様の辺りまでしかありません。

あとは殆ど全部、丘が連なる山間部ばかりです。といっても標高が高いわけではないので、稜線の林の中を歩いていると、遠くに海岸のざわめきが聞こえたりすることもあります。

雑木林のむこうに民家が見え隠れしているたたずまいを見ると、ここに暮らしている人たちは、その雑木林と丘陵を自分の庭のように感じているんだろう、いい環境だと思います。散策をするのにも、自然との間合いがいい感じです。

小泉さんの銅版画はそうした鎌倉の丘陵に連なる雑木林であったり、山あいの細い路を歩いて、現れる旧い家屋のたたずまいなどを写真に撮って銅版に焼き付けて、製版をした銅版画です。

小泉さん自身はそれらの版画をフォトエッチングと名付けて、自身の印象を定着させ続けているのだと思います。

小泉さんの作品を見た時に、多くの人が感じるだろう、

「海辺の草叢」　フォトエッチング

このセンシティブな画面が文学的な視線に基づいていることを私は強く感じ、その印象を書くことができればいいなと想いながら、ずっと考えていました。しかし、感じることと、書くことは当然別物です。

また、小泉さんの作品の繊細さは、この小冊子での写真の印刷からは消えてしまうだろうなと思ってもいます。

伝わらないよ、といいながらこうして冊子を作ろうとすることは非常に無責任なことだとも思いますが、小泉さんの持っている過去への憧憬といえばいいのでしょうか、記憶の詩情のようなことはきっと感じてもらえるのではないでしょうか。

去年、小泉さんの作品を見た時にまず強く感じたことは、版画というのは版に載せたインクを、紙に写す、移動させることなんだなということでした。

当たり前のことに思われるかもしれませんが、版にインクを盛って、紙の上へ移動させることが、どれほどこまやかな注意を要求されるのか、必要な場所に、必要な量のインクを移すことが、息を詰めながらもゆっくりと確実に工程を踏まなければならない必須の条件なのだと思ったのです。

ますます当たり前なことですが、作品となる画面が要

「霧の中へ」　フォトエッチング

求するインクの量がおのずと規定されて、それにあった適切な方法と、制作の意思によって、配置と制限が繰り返されるイメージと、インクとの置換には厳密な規定が要求される、それが版画を作るうえでの大きな必須の条件ではないでしょうか。その規定が、技術であったり、意思であったりしながら、決められたインクの移動を促すのでしょう。

それらをコントロールする作者の意思が技術の裏付けを得て、如実に画面へ反映される出来事として、作品になるんだと思ったのです。ほんと、当たり前のことだけど。

一般的に芸術と技術は相反する要素になって、互いに阻害することが多いと私は思うのですが、版画の技術は単なる技術ではなくて、作家の意識によってコントロールされる意思なのだと思います。

だから、技術が想像を支配をするのではなく、技術そのものをコントロールすることで、想像が拡がるのではないでしょうか。

今までにも、銅版画を見ているとそういう気持ちになることが、何度もありました。

インクをコントロールするために、版を磨き、腐食の

「空の葉脈」　フォトエッチング

調整やグランドの作り方も、紙の湿らせ方、プレスの扱い方まで、ひとつひとつ細心の注意が要求されることでしょう。

そうしたプロセスの様々な段階で、技術に要求されることがあり、その規定と、想像の間に生じる差のようなものが、作家の中でバランスをとりながら版画はきっと進むのではないでしょうか。

版画のまね事しかしたことのない私にとっては、版画の実質的なプロセスは想像するしかありませんが、小泉さんの作品を見ていると、こうした工程への想像がつぎつぎと浮かんできます。

そして、そうした技術的なことよりも、小泉さんがなぜこういう記憶の場面を描くのか、という画面への想像を拡げることと、想像の魅力に惹かれる自分もあります。

あまり人が通ることもないような、細い山沿いの路を背丈の高い草や茂みが覆い隠すように重なっている風景には、かつてそこを人が通っていたのかもしれない、今は人の息吹よりも、草の息のほうがはるかに優勢で、人々のかつての姿に思いを誘う光景や、郷愁のようなものに関心が繋がるのかも知れません。

6　雷雨

畳の上に寝転がって、雷雨の空を見ている
真っ暗な雲に覆われ
その中を突き抜けていく光の矢
幽かにきな臭いにおいがしていて
あとはブーンとあおい水のかおり
雨が屋根を打ち土を打ち木の葉を打ち
ありとあらゆる物を打ち
地面を川のようになって流れてゆく

にぎやかに、雷雨の楽団

僕はボケーッとその光景を眺めている
ただ見ている分にはなんて美しいのだろう
天の怒りすらも、神の芸術のように
移りゆく時間を眺めていることの微慢さ故に
今、私の胸に感謝の念すらも湧かない
横たわる私の目に流れ込む時の奔流
何れ現れるであろう暗黒への誘いの為

小泉さんが意識したかもしれない、過去の時間への郷愁が観る側にも感覚される感覚のシンクロなのかもしれません。

小泉さんは作品写真と一緒に展示して欲しいと、6編の詩も送ってきました。6編のうち最後の「雷雨」という詩を上の段に転載します。

送られてきた6編とも、子ども時代を過ごした故郷での記憶の風景です。

失われた時間の影に未だに囚われつつ、それらの時間の記憶なかで、外界と自分の視線のズレを見つめ続けているのでしょう。そのズレを稲光のにおいであったり、寝転がっている畳の感触から、外界とのかい離と融合を同時に発見した、記憶の時間が孤独な自分を確認する回路になっているのでしょうか。

かつて、そこの上には人が暮らしていたであろう、古い石の階段。両側から草と薮が、いくら記憶を隠そうとしても、端正な石の角がある限り、息吹までも覆い隠すことができないことを、小泉さんは感じ取っているのではないでしょうか。

自分の故郷の畳の感触と稲妻のにおいのように。

「秋の径」　フォトエッチング

小泉 美佳

記憶のレース

菅沼 緑

「春の音」　木口木版

「doll」　木口木版

「晩夏」　木口木版

「ゆりかご」　木口木版

小泉美佳さんの版画は木口木版です。

木口木版についても、私には全く経験も、制作現場を見たこともなく、何かで聞きかじった程度の知識しかありません。知っているのは堅木の木口をビュランで彫る、という程度のことです。

だけどやはり、これらの版画を見れば、その技法がどうのこうのと言うことなどより、小泉美佳という人の記憶の糸が繊細なレースのように編まれて、饒舌なくらいに美佳さんの多くの記憶を溢れさせているように感じたのです。

誠さんの作品からは、自我の意識と共に、自らの存在と、故郷での光景を重ね合わせた、記憶の再現のような画面だと感じさせられました。多くの人にも存在する記憶の底に沈んでいる光景と同様に、記憶の成り立ちにまで拡がる、古い記憶の確認だと思いました。

また同じように、美佳さんの作品も子ども時代に紡がれた記憶だという気持ちが強くします。子ども時代の未熟な自我にも、大きく強く押し寄せる押しよせる外界からの波。小さな心には予期もしない大人の言葉が、小さ

「doll 彩」　木口木版

「手風琴」　木口木版

くても深く傷つく心の痛手が波のように寄せてきます。小さな胸におし付けられる刻印のように世界というものが、現実という名のもとに降りかかるのです。

それは誰にでも刻まれただろう傷の記憶。記憶というものが傷そのものを意味することもあるし、ほのかに薫る淡い光景を意味することもあるでしょう。

心の故郷。記憶のふるさとで泣いたり笑ったりした、子ども同士の結びつきと、その思いで。

楽しさも、悲しさにもに満ちた記憶は大人になるにつれて、意味も変わり、時間と共に姿まで変わることもあります。降り積もる記憶の上に未来が道を延ばして、あらたな世界に昇華するのでしょう。それが作品化ということでしょう。

時間という線路に記憶の駅をひとつずつ置いて、人の中には名前のない駅が増えてゆきます。

糸電話の細い糸がそれらの駅を結んで、記憶の電話が伝わってくるのです。

「もしもし、駅で忘れ物の届けがありませんでしたか？小さな緑色の毛糸の手袋の」、とぎれとぎれに糸電話が震えるのです。

糸電話の主は記憶のレースを編む手を休めて糸電話に

「旅立ち」　木口木版

「沙羅の声が聞こえる」　木口木版

散らばった記憶のことを尋ねるのです。美佳さんのこれらの絵を見ていると、観ている私自身の子ども時代の記憶までもが映しだされて、糸が震えます。

もっと、想像を膨らませれば、それは、大人の世界の理不尽な現実と、子どもの日常がすれ違うことです。

それが子どもの、濁りも経験も少ない子どもなりの記憶と、振動のはざまがこうして、遠い大人の世界でよみがえるのです。

何度も繰り返しますが、記憶と想像が織りなす綾なのかもしれません。

だけど、子どもは子どもで、つぎつぎと自分を見舞う、外界との差異に強く打ちひしがれ、傷つきながら違和感を知るのでしょう。そうやって、成長の前に立ちはだかる、荒波の向こうの「社会」というものに否応もなく加わらざるを得ないのです。

自我は柔軟に、強度をましてゆくのでしょう。様々なすれ違いを重ねて、自分というものと世界との差が重なりながら、記憶の駅に戸惑いを降ろし、またある駅では別の記憶を載せてゆくのでしょう。そうやって、だれもが感性と経験も貯めてきたのです。

そうした記憶の駅と駅を結ぶ糸を編むのが作品の生ま

「夏草の海」　木口木版

「静かなる音の始まり」　木口木版

れ方だとも思うのです。

女の子の髪に飾られた花や、樹の葉の模様。ウサギの船の周囲をびっしりと埋める数々のゼンマイのような波の模様。

それらが、漆黒の背景に浮かんで質量を感じさせる、木口木版の繊細な線と黒とが相まって強い少女の眼差しを感じさせているのだと思います。

伏し目がちにわずかにうつむいていても、髪の模様が優しさを示しても、結んだ口元の意思の強さが、女の子が備えなる毅然さが溢れているように感じてなりません。

版画というのは、職人的な技術をどうしても備えなければならないし、丁寧に工程を進めることで、インクはきちんと紙に乗り移り作品になります。

小さな木口に向かってひとつひとつ工程を歩きながら、製版作業を進める眼差し。それを強く持たなければ、描画の動機になったイメージを保つことができなくなるのでしょう。

それが版画の作られるプロセスだと思います。

そういう版画の工程と、美佳さんが抱く記憶が編まれる工程がシンクロしていて、ここに描かれる子どもたちの意思も強く反映されているのだと感じるのです。

後記

冒頭のページで「これから」ということで、小冊子の作り方を考えてみましたが、そもそも、このまちてくギャラリーを始めようと考えた、日常の美術のことをこれからも考え続けたいのです。

日常ということ、それは毎日のことだと思うのですが、あまりにも漠然としていて、実はすごく難しい問題でもあります。

でも、非常に大事なことだと思うのです。毎日続けることは一番難しいし、毎日のことを考えるものです。

時には横道にズレることも快々にしてあるけれども、なにがしかの日常に思いを寄せていたいと思います。

「日々の眺め」というようなかたちで、いろいろな人に寄稿をお願いしようということで考えています。

気がつけばずっと前からそこにあっても、忘れられてきた何かが、語りかけてくることがあるかもしれません。又、よく見ている筈の作品がある時違った姿を現すこともあるでしょう。

日々の思いや気付きで風通しのいい空間が現れて共有できるようになればなおのこといいと思います。